

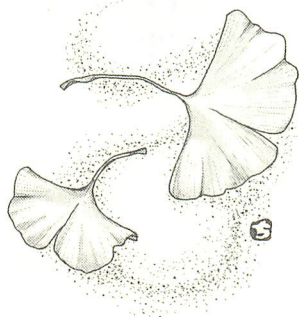
みめじみの

第2部



みめじみの

第2部



大谷光道著

目次

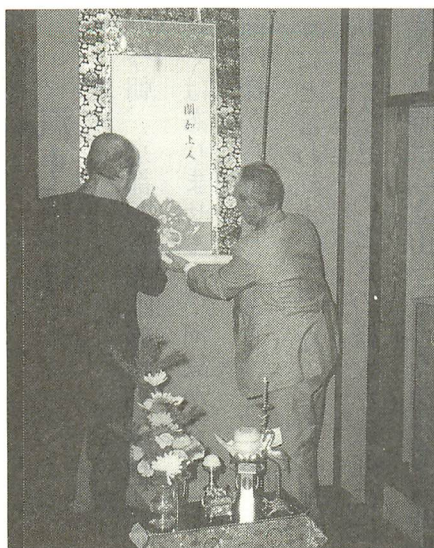
御移徙	2
汽車ぽっぽ	4
仏様の「力」	6
仏様が見える	11
和讃講	16
ちいちの花	19
三十六百千億	21
相と好	23
明るいところでは メガネがいらぬ	26
幻覚	28
あとがき	31

御ご移い徙し

今日は、前門跡・せんによ 闡如上人の御影ごえいのお入りと、その法要（御移徙いし法要）をいたしました。当地へは一年もご無沙汰になってしまいました。闡如上人の御影の在家へのお入りは今日が初めてでして、前門様とのまことに深いご縁を偲ぶことができます。

闡如上人がお亡くなりになって四年半ほどになります。満九十年にあと半年で届くご生涯でした。





数々の忘れられぬご事績のなかで、まず海外開教があげられます。戦前は中国大陸、戦後は北米・南米です。アメリカ・ブラジルなどへの開教にたいへん力をお入れになって、「北南米の御開山」と呼ばれるほど有名でした。

昭和二十年代から何度か海を渡られました。ブラジルの赤土の土煙など、日本では想像できないくらいのもので、自らお撮りになった十六ミリの映画を何度も見せていただいたのを思い出します。皆様方も、昨年出版された前門様夫妻の生涯を収録した写真集『みめぐみの』でご覧いただいていると思います。あのような赤土にまみれて苦労なさってきた方々とのお念仏のふれあい伝わってくるようです。

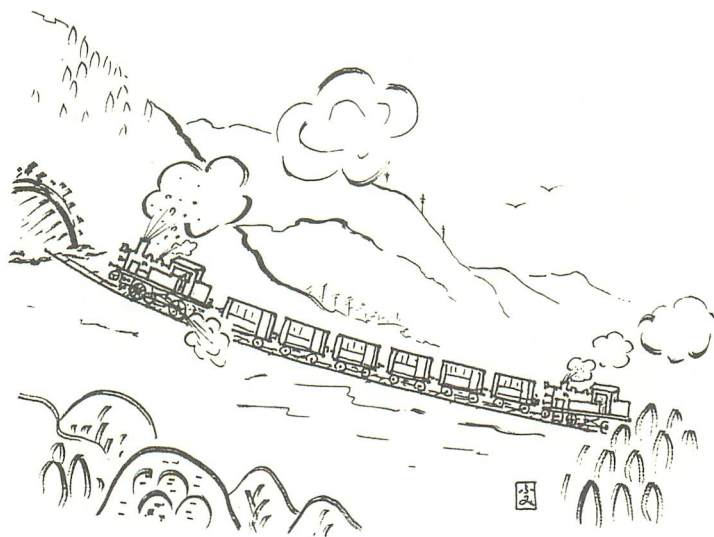
汽車ぼっぼ

今朝、京都から北陸線の「雷鳥」でまいりました。よく乗る列車なので珍しくはありませんが、何故か昔のことを思い出しました。私が十歳のときに前門様から得度してもらって、次の年に富山県井波の瑞泉寺の住職になるようにと言われました。なんでも、地元の強い要望だったんだそうで、「初入り」（入寺）のときの盛大な歓迎には腰を抜かす程でした。それはともかく、当時は「立山」という急行で六時間以上もかかって、年に何度か井波と京都の間を往復しました。

「立山」は今の「雷鳥」のような電車ではなく、蒸気機関車——いや、SLといわないと最近は通じない——に引っ張られる「汽車」でした。トンネルの手前に来ると慌てて窓を閉めないと真っ黒な煙と石炭の粒が入って来て、目に入ったたり鼻の穴が真っ黒になったりでした。こんな乗客の騒ぎとは裏腹

に、今は本線から外れてしまった杉津さいづの断崖の上から眺める海の景色のすばらしかったのが懐かしく思われます。

『汽車ぽっぽ』の歌、ご存じでしょうか。小さいときに習われたか、習われなくても耳にされているはずです。汽車の歌はいくつかありますが、「おーやまーの、なーかーゆーく、



お山の中ゆく

汽車ポッポ

ポッポ ポッポ

黒いけむを出し

シュシュシュ

白いゆげ吹いて

機関車と機関車が

前引きあと押し

なんだ坂

こんな坂

なんだ坂

こんな坂

トンネル 鉄橋

ポッポポッポ

トンネル 鉄橋

シュシュシュ

トンネル 鉄橋

トンネル 鉄橋

トンネル トンネル

トントントントント

のぼりゆく

きーしゃぼっぼ……」という歌です。

この歌を聞くと、山の中を登り坂を物ともせず、真つ黒な煙を吐きながら曲がりくねった道をたくま遅しく登って行く二台の機関車にはさまれた列車が浮かんできます。蒸気機関車の魅力はマニアでなくても何かひかれるものがあります。

仏様の「力」

「本願」という言葉を、お説教を聞いたことのない方でも、耳にされたこととはおありでしょう。

本願というのは菩薩が仏になる前、修行中に立てられた誓い（誓願）のことですから、何も阿弥陀様に限らず他の仏様も同様で、たとえば薬師如来の十二の大願というのも本願です。

阿弥陀様がご自分の本願をお建てになるには、五劫という長い間思案に思

案を重ねられて、そのあと何劫とも判らないほど長い間ご修行（歴劫修行）になり、そして阿弥陀様として成仏（それまでは「法蔵菩薩」ほうぞうぼさつ）なされたのですが、今で十劫を経ております。想像しようにも、とても及ばない長い時間をかけて、計り知れない数々のご苦勞の末、阿弥陀様のご本願が実現（成就）したのであります（「劫」については、『みめぐみの』第一部参照）。

阿弥陀様は「他の仏様のご本願から漏れた私たち凡夫を成仏させる」ということがその特徴で、そういう本願をご成就下さいました。別の言い方をすると、修行をする者を助けるのが他の仏様で、修行をしても実らない者——つまり凡夫——を成仏させるのが阿弥陀様。

この本願の働きのことを本願力ほんがんりきといっています。ここで、私たちの日常の言葉で、「力」のつく言葉を思い浮かべてみてください。馬力、財力、水力、…。例えば馬が馬だけであれば、馬ですけれど（笑）、要するにそうでしょう（笑）。それに「力」がついて、「動き」、「ものを動かす働き」、「パワー」と

なり、これを「馬力」といいますね。皆同じことで、財が財だけであればじつとした動きのない「お金」を想いますが、財力となると「力」を感じ、善きにつけ悪しきにつけ権力と同じものを感じます。水にしても水だけなら水玉の水や水道の水。「水力」というと水力発電などのパワーを感じます。

「本願」はもちろん本願だけでも尊いのですが、動きは感じません。本願も本願力も本質は同じだけれども「本願力」となると、それはパワーであり、迫ってくるものとなります。私たちをすくい取るパワーです。それは、私たちを「間違はなくお浄土に往生させて成仏させる力」で、それによって私たちに与えられる安心感のことを信心といいます。このような信心ですから、当然今生きているこの世の生活も明るく力強いものになります。これが浄土真宗の現世における利益りやくです。

本願力は今「この私」——つまり皆様方お一人お一人——に働いているのです。私たちに正しく物を見せ、勇気を与えてくださるのが阿弥陀様の本願

力の働きであります。前から引つ張り後ろから押してくださる、まさに「阿弥陀様は機関車」であります。

阿弥陀様というのは、ものをお願いして、たとえばお金もうけをさせてくださいといってお金もうけをさせてもらったり、或いは安産をお願いして安産を実現させていただいたり、そういう「何かを叶えてくださる神様」ではなくて、私たちに本当に正しい物を見せる光であり、それを乗り越えさ



せる力、エネルギー、勇気ですね、それを与えてくださるお方であります。

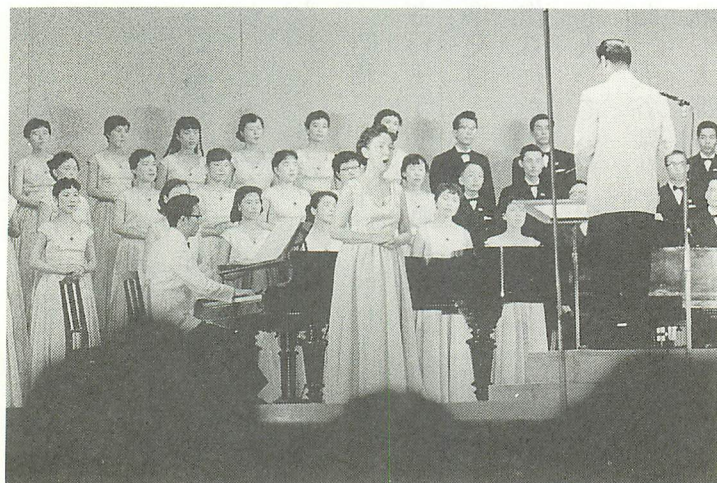
前と後ろから、引つ張る機関車と押す機関車のお話をいたしましたが、こんなことを考えておりましたら、これも皆様方、耳にたこができてるんじゃないですか、『二河白道』のお説教と似てるでしょ。前の方から阿弥陀様がお呼びになる、後ろからお釈迦様が「心配せんと行け」といって押してくださる。

私は『二河白道』のたとえを説かれた善導大師（親鸞聖人が敬われた七人の高僧の中の一人）と「同じくらい偉くなったのでは……」と思うんですが、だれもそう言ってくれません（笑）。同じことを思いついたといっても、善導大師はおいしいものは自分で食べずに必ず人に与えられた。私はその逆です、大違いですね（大笑）。

仏様が見える

この「機関車の見える歌」と同じように、「仏様の見える歌」があります。『讃仰歌』と名付けられた三十曲ほどの合唱曲で、硬い感じがしないためか、どうしても「仏教聖歌」の範疇はんちゆうに入れる気がいたしません。それはともかく、なんといつても『讃仰歌』の特徴は「仏様が見える」ことです。

昭和二十二年に前門様夫妻が結成なさった「大谷楽苑がくえん」という合唱団がございます。「終戦直後の日本人の荒すさんだ心に潤いを……」と結成された大谷楽苑は、寺院や門徒の方に限定せず、新聞を通じて全国から歌詞を募集して作られた『讃仰歌』を歌う合唱団です。「日本人」という以上、当然ご自身も入っていたのだと思います。そうでないとおんなじに力が入りませんものね。大谷楽苑でのいっぱいいっぱいの想い出ももちろん写真集『みめぐみの』（讃仰歌も大部分をCDに収録して添付）に入っております。



前裏方と大谷楽苑

『讃仰歌』は例えば、お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんと生活しているその中に、阿弥陀様も一緒にいてくださるという歌であるとか。池の中でつぼみを開こうとする蓮の花を仏様が見ておいでになるとか。眠っているおさな子^ごがほえんだのは仏様が額に手を触れられたのだろうかとか。農作業^{くわ}をしている、その中にもみ仏が宿ってくださいているとか。つまり「いまそこに阿弥陀様がおいでになる」という明

るさと「その阿弥陀様に支えられている」という安心感・充実感が漂ってくる歌です。

コーラスの活動は大谷家内のホールでやっておられたので、私は子供の頃、毎週土曜日夕方の練習の歌声を聞きながら育ちました。前裏方はもちろん、私も兄・姉も全部そのコーラスに属しておりました。前門様はいわゆるマネージャーの役で、練習や演奏会の模様を録音したり、演奏会のプログラムやパンフレットの制作、演奏旅行の手配等をされておりました。

こちらのご住職も京都で大学生だった頃、大谷楽苑のメンバーでした。その頃私はまだ小さくて随分お行儀が悪く、そこいらを走り回って練習の邪魔をしていたんだそうで、先ほど車の中でそれを聞かされました。昔のことを知ってられる方は困りますね（笑）。

正直いって『讃仰歌』をあまりいい歌だとは思っていませんでした。「まあしようがない、ここに属してるから歌わんならんのか」という程度で：

∴。前門様に叱られるかもしれないませんが、そういう状態でした。

ところが、前裏方のお葬儀で、そしてまた前門様のお葬儀で、大谷楽苑の方々、そして昔メンバーだった方々が、大勢駆けつけて、『讃仰歌』で見送ってくださいました。

情けないことなんです、そのころから私自身、『讃仰歌』に対する見方、感じ方がやつと変わってまいりました。わたし自身でどうしてこんな感じになるのか、しばらくわからなかつたんですね。よくよく考えてみますと、歌詞——曲もそうですけども——「歌詞がだいぶんほかの歌と違うな」と。つまり、「仏様の見える歌」なんです。

ところで、『汽車ぽっぽ』の歌は、仏様のことを考えて作られた歌ではないはずなんです、こちらの方は仏様が「見える」というよりも、仏様の「力」を想わせます。

皆様方も身の回りで仏法とつながるお話でも歌でもたくさんおありのこと
とと思います。なんでもない普通のことだ仏法と繋がっている。これは当たり前
前といえば当たり前のことなんですが、一見仏法と関係ないようなことが、
仏法と繋がっていて、発見したときはまことにうれしいものです。こういう
楽しい経験が、お念仏の生活をより明るくより力強くするものです。

今日の前門様の当家へのお入りに当たりまして、話が機関車にまで及んで
しまいました。これから、寒さに向かいますので、おからだに気をつけられ
て、また来春お会いできるのを楽しみにしております。

和讃講

今晚は。(今晚は。)

最初にお礼を申し上げておかなければなりません。十三日に前門様のご祥月のお勤めをするのですが、みなさんが仏具のお磨きを買

って出てくださいました。随分念入りに磨いていただいて、たいへん綺麗にしていたできました。先日受け取り、早速拝見しようと思って手を出しかけたんですが、指紋が付いてはと思って新しい手袋などを用意して気をつけて



拝見しました。どうもありがとうございます。

今日はこの三つのご和讃を見ていききたいと思います。

一一ちいちのはなのなかよりは

三十六百千億さんじゅうろっぴやくせんのおくの

光明てらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

一一のはなのなかよりは

三十六百千億の

仏身もひかりもひとしくて

相好金山そうごうこんぜんのごとくなり

相好ごとに百千の

ひかりを十方にはなちてぞ

つねに妙法ときひろめ

衆生を仏道にいらしむる

みなさん、繰り読みでお勤めをなさっていて、ご和讃には深く親しんでおられますが、おさらいを兼ねて語句の説明から始めることにします。

今日も先回と同じくはじめが同じご和讃ということで、「一一のはなのなかよりは」で始まる二つのご和讃ですが、まとまりが悪いので次の「相好ごとに百千の」というご和讃と一緒にしてお話します。

ちいちの花

まず、「一一いちいちのはな」。これは言葉通り、一つ一つの花という意味ですが、それをお勤めするときには「ちいちのはな」と読みます。

何の花かというところ、お浄土（極楽）に咲いている「蓮華はす」、「蓮はす」ですね。

野原に咲く小さい方は「蓮華草」というようです。

この三つのご和讃は、極楽の蓮華を褒めたたえた部分です。このほか、宝樹じゆ（極楽の木）や宝池ほうち（極楽の池）を褒めたたえたご和讃が、この前後にあります。このご和讃は曇鸞どんらん大師（親鸞聖人が敬われた七人の高僧の中の一）の『讚阿弥陀仏偈さん』の内容をもとに御開山（親鸞聖人）が作られた四十八首のうち三首です。こちらのみなさんはよくご存じのことですが、『和讃』というのはその字のごとく大和やまとことばで仏徳を讃えられた、つまり『和讃』です。



三十六百千億

「三十六百千億ってどんな数字や」ということですが、「三十六」で切れ
て、それから「百千億」です。

「三十六」というのは、六色の六倍のことで、「 $6 \times 6 \parallel 36$ 」です。七色
というほうが私たちは慣れていますが、ここでは六色、「黒・白・赤・黄・
青・紫」。

この中で不思議なのは黒の光ですね。黒というのは吸収するだけの色で、
いわゆる色のない色。でもやはり、黒は黒なりの輝き、光、味を持っている
という、お浄土ならではのことなのでしょう。このように六つの光が互いに
照らし合って、三十六の色になる。

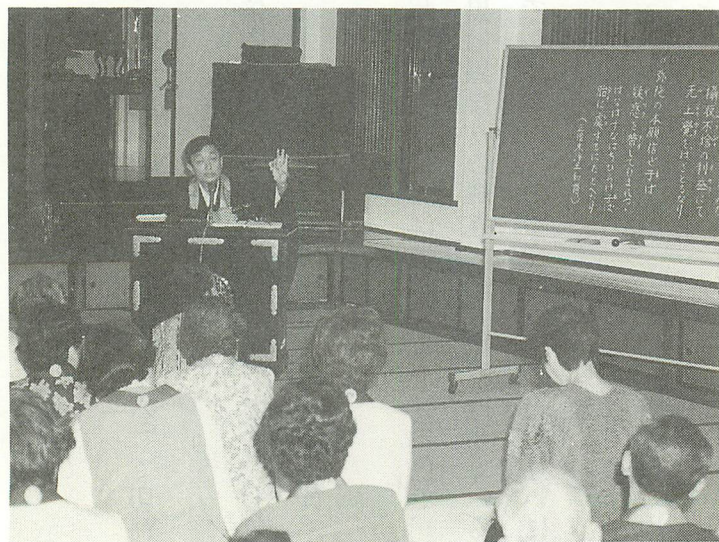
「百千億」というのは、大変数が多いという意味で、「一つ一つの花の中
から、そういう無数の種類の……」ということです。

「ほがらか」は、私どもがふだん使うのは気持ちの朗らかさで、この時代にはもっと意味が広く、晴れやかで、曇りが無い、明かい、明かるさでも透き通ったような明かるさを表現するのに使った言葉です。

「いたらぬところはさらになし」。

このようなほがらかな光がどここまでも至っている。光の届かない所はない。

いつもお勤めする正信僞に出て



くる「無辺光」(終りのない光、どこまで行っても終らない光)や、「無尋むげん光こう」(遮さへぎる物があつても遮られることなしに通り抜けて、暗いところを作らない光)も同じことで、お浄土にこのような光を放つ蓮の花がいっぱい咲いているということです。

「仏身」というのは仏様のお体。仏様のお体と光が同じである。

相と好

「相好」というのは仏様のお姿。それが、金山こんぜん、「金の山の様に尊いんだ」と。

「相」というのは三十二あって、目につきやすい、わかりやすいお姿の特徴(三十二相)。「好」の方は八十あって、もっと細かい、ぱっと目につきにくい特徴(八十随形好はちじゅうずいきょうじょう)。日常の言葉でも、人の顔付き、様子、体付きなどのことを「相好」ということがあります。元はここから出ております。

足が、偏平足（べた足）。これが一つの特徴なんですね。

舌が大きくてお顔を覆うほどである。『阿弥陀経』に、「出廣長舌相しゅつこうちやうぜつそう（広

く長い舌の相を出して）偏覆三千大千世界へんぷさんぜんだいせんせかい」
というところが六回出てきま

す。三千大千世界（『みめぐみの』第一部参照）を覆うほど大きな舌で、説法される。「説法が行き届く、そのために舌が大きい」ということです。

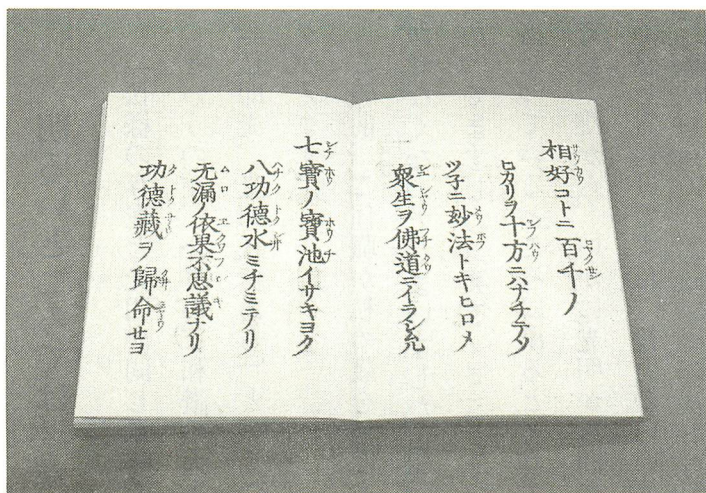
手を真直ぐ伸ばすと膝のあたりまである、手が長い。頭の頂上が盛り上がっている。眉間に白い毛が生えている。それとか、歯が四十本ある。

などなどの特徴が「三十二相」の方です。

次に、「八十随形好」の方は、例えば耳。耳たぶが丸くて長い。ふくよかな耳だとかいいますね。あるいは、歩き方がゆったりと象の様に歩かれる。

こういうのが、「好」の方です。

相好というのが仏様の特徴ということだから「相好ごとに」というのは、「一人一人の仏様ごとに」という意味になります。この仏さまというのは、



浄土和讃

いわゆる「化仏」、化身仏であつて、私たち衆生に説法するため、人間の形になつて現れられた仏様。

そのお一人お一人からまた百千の光が十方に放たれている。十方というのは、東西南北、上下、北西だとか南東だとか各々その間の方向、これらを全部あわせると十になるでしょ、それが十方ですね。

「妙法」いうのは素晴らしい法、つまり仏法のことです。

明るいところではメガネがいららない

「仏様の存在と光明が同じ意味を持っている」

というのが、今日のご和讃の大事なところであるといいただけます。つまり「仏即光、光即仏である」ということをここでおっしゃっているように、うかがえます。

この前、ご住職が私の歳を何度も宣伝してくださったので、いまさらごまかせなくなっていました（笑）。それに老眼、いや遠視の「メガネ」もかけてますしね（笑）。ここでならメガネがいるけれども、昼間お日さんが当たっているところに出るとメガネはいらないですね。不思議なほどよく見える、だから、いかに光明が人間に物を見せているか、ということをつくづく感じるわけですね。視力のいい人の場合でも、明るいところへ行くともっと細かいものまで見えるようになるはずですよ。

ところで、お釈迦様の時代など、そんな昔はメガネってなかった。その時代における光の大切さは、想像が付きません。インドのことではありませんが、イランとかイラクとか砂漠がありますでしょ、聞くところでは、あちらの方の夜って本当に暗いんだそうです。真っ暗で何も見えなそうで、光明に対する有難さは我々にはとても想像できないものなんだそうです。日本ではまあ暗いといっても、しばらくして目がなれたら見えてくる、そうでしょう。山の中に入ってもうっすら、夜でも山の線が見える。また現代の私たちは、多量に電気を使うことで夜でも明るい場所を作ることができます。いずれにしても、光明の有難さというものが、我々が今考える以上にはるかに現実的なものであったと言えます。

物がよく見えるということは、道を間違えないため、つまずかないための決め手になります。また、危険を避けることもできる、やるべきことをいち早く見いだすこともできるわけです。私たちに物を見せるための仏様の光明

としての働きを讃えることが、このご和讃の中心課題であるといただけです。

もちろん、単に目に見えるもののことではなく、日常の私たちの心の世界が説かれているのです。

幻 覚

「金に目が眩くらんで……」で始まる話は、例外なく哀れな結末となります。欲のために物事のありのままの姿を見ることができず、正しい判断ができなかつたから、哀れな結末を迎えるのは当然のことです。

これは貪欲とんよく（むさぼり）の結果であります。この貪欲のほかに、瞋しん恚い（いかり）と愚痴ぐち（おろかさ）という代表的な煩惱三つを合わせて、煩惱の三毒といえます。

煩惱（または惑わく）とは、字のごとく心身を煩わづわし悩なませる作用のことで、

さらにこの迷いの根源が「無明」です。これも字のごとく、「明るさがないこと」「暗いこと」です。暗くて見えないから迷うわけです。

「金に目が眩んで……」というのは大変わかりやすい実例で、「金に目の眩む」機会を与えられない私たち（笑）は、仏法に縁がないことになりま

す。
ところが例えば「すべては無常であり、常住不変（いつまでたっても変わらないもの）のものは存在しない」ということが頭でわかっても体がついていていない状態は、やはり「無明」と言わざるを得ません。

ここに仏様の光明としての働きを仰ぐことによって「無明」は破られ、これが「南無阿弥陀仏」です。

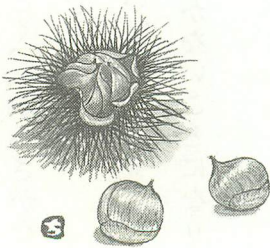
無明というイメージがつかみにくいのであれば、次のように言ってもよいわけです。

「煩惱によって幻覚（真実でないもの）を見て、その幻覚を真実だと思

込んで行動を起こす。当然その苦しい結果を受ける」と。

私のような凡夫は、南無阿弥陀仏によつてのみこの「幻覚」から解放されるのです。皆さんはいかがですか。

お付き合いどうもありがとうございました。



あとがき

みめぐみの刊行委員会

おかげさまで『みめぐみの』第二部の発行となりました。第一部はいかがでしたでしょうか。

幼い子供を持つ若いお母さんが「表紙の絵が、わが子を育む合掌の手に見え、母の心として素直にページをひもとき、何度も何度も読み返しました。読む毎に心が爽やかになり、子育てに勇気が湧いてまいりました」と。

また、「以前からずっと持っていた疑問が解けた」等々、沢山の御感想をお寄せ下さいました。ありがとうございます。

前冊同様、浄土真宗のみ教えの響きに親しんでいただけたらと存じます。

尚、第一部も更に増刷しております。第二部で初めて親しんで下さった方への御用意も致しておりますので、お申し出ください。

みめぐみの 第2部

1997年11月10日 印刷
1997年11月15日 発行

定価 200円

著 者 大谷光道

発 行 みめぐみの刊行委員会

〒600 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内

TEL. 075(351)3555 FAX. 075(351)3120

振替口座 01060-5-56990

印 刷 (株)中外日報

